

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ルイ・ジャン・デブレ（一七四三—一八〇四）、  
フランチェスコ・ピラネージ（一七五八／五九—一八二〇）  
《ポツォーリのセラピス神殿》  
一七八一年？

紙、アウトライン・エッチング、手彩色  
四六・七 × 六六・二cm

フランス人建築家ルイ・ジャン・デブレの素描を元に、イタリア人版画家フランチェスコ・ピラネージが彫版し、手彩色を施した一点。主題は、南イタリアの港湾都市ポツォーリに現存する、古代ローマ時代の市場とその建物跡である。一七五〇年代の発掘で、エジプトの神セラピスの彫像が出土したため、この遺構は長らくセラピス神殿の跡と誤認されてきた。南イタリアの豊かな自然を背景に、画面左にそびえる巨大な円柱を指さしながら議論するグラランド・ツァー（英国貴族の子弟らによる、学業の総仕上げとしての旅行）の旅行者たちを中央に据え、ポンペイなどの遺跡発掘から始まった当時の考古学熱への高まりを表現した作品である。

（上席学芸員 南美幸）

No.  
**157**  
2025年度 | 春 |

## 静岡県立美術館の40年を振り返る 1

### 谷田でなきやヤダ

館長 木下直之

当館の所在地は静岡市駿河区谷田である。なぜ、谷田にあるのかを考えるうちに、親父ギヤグを抑えられなくなった。悪い癖だ。しかし、本当に「谷田でなきやヤダ」と声を挙げた谷田の住民がいたのだ。

一九七九年七月七日に、静岡市・清水市谷田住民は「静岡県文化センター内文化施設に関する要望書」を県教育長に提出した。そこには、「私達が県民の要請により用地買収に協力した最大の原因は図書館、美術博物館、音楽堂と園地で構成する理想的な文化施設計画であったからです」とある。

この年の一月に、県は県議会開設百年記念事業として美術博物館の建設を決定した。それが駿府城内に建てられそうだという報道に接し、驚いた谷田住民は約束が違うと異議を申し立てた。谷田に図書館、美術館（すぐに美術博物館と変わる）、音楽堂、体育館から成る文化センターを建設する構想

は、早くも六三年六月に斎藤寿夫知事が公表（「建設趣意書」、七〇年四月には県立中央図書館が開館したもの、あとが続かないままだった。

県の論理では、新たな美術博物館はあくまでも百年記念事業であり、文化センター構想とは別のものである。八〇年七月一日に、建設計画委員会が教育長に提出した答申は「建設場所は県の中心地であり、県民が等しく利用できる利便性の高い場所、かつ歴史的背景の地である静岡市駿府公園内の駿府会館跡地が適当であること」とした。県はいわば「谷田ではヤダ」といつて一

歩も譲らなかつたが、着工直前に建設予定地から中世の遺構が見つかった、急転直下、駿府城から谷田に変わった。そもそもなぜ、文化センターに谷田の地が選ばれたのだろうか。谷田は静岡と清水の両市にまたがっていた（合併後のいまもなお駿河区谷田と清水区谷田）。もともとは谷田村だったが、

一八八九年に草薙村や中之郷村などと合併し有度村谷田となった。ふたつの都市にまたがる谷田はいわば政治的に絶妙な位置にあり、紛れもなく「県の中心地」であり、なるほど「センター」の名にふさわしい。加えて、草薙神社を有する有度山（当館もまたその山麓にある）は「歴史的背景の地」でもある。先の答申で駿府城内が適当であるとした根拠は揺らぐ。

草薙は、いうまでもなくヤマトタケル伝説の地である。昨秋、東京国立近代美術館の「ハニワと土偶の近代」展で中村直人（草薙剣）「ヤマトタケル像を目にして驚いた。それが静岡市立登呂博物館の所蔵だったからだ。なぜ登呂に？」

四一年の第二八回再興院展に出品された〈草薙剣〉を静岡市が譲り受け、早くも翌四二年一月には市長公室に安置された。有度山、あるいは東海道を挟んだ谷津山に神殿を造営し、「東海

第一の聖域を作る」計画があったからだ（「読売新聞」四二年一月二三日）。企てたのは、四〇年の静岡大火の後、静岡市臨時復興局長となった阿部喜之丞である。阿部は「この機会に浅間神社の賤機山上には南方征服者山田長政の像を、また谷津山内に郷土史蹟を蒐集する歴史博物館とも言ふべき郷土館をも奉賛会で組織して新設したいと思つてゐます」と語った（「静岡新聞」四二年一月二三日）。この構想は実現せず、〈草薙剣〉は五五年になって静岡考古館（七二年からは登呂博物館）に収蔵された（「ハニワと土偶の近代」展企画者の花井久穂研究員と登呂博物館の岡村渉館長のご教示による）。

当館が谷田にあることを、このあたりまではさかのぼって考えてもよいだろう。文化センターもある種の「聖域」作りだからだ。来年、当館は開館四〇周年を迎える。開館に至るまでには、先人たちによるたくさんの努力があり、そのあり方をめぐって多くの議論が交わされてきた。文化センター構想以来、館の名称は、美術館、美術館（兼博物館）、県立博物館、総合博物館、美術博物館と二転三転した。来春の展覧会に向けて、四回にわたり、当館のこれまでを振り返り、これからを展望してみたい。

ブルックリン博物館蔵 特別展

## 古代エジプト

2025年4月19日(土)~6月15日(日)

古代エジプト文明が人々を惹きつけるのは、今も昔も変わりません。当館収蔵品の作者で言えば、ジヨヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ（一七二〇〜一七七八年）やジヨヴァンニ・バッティスタ・ティエポロ（一六九六〜一七七〇年）らの作品には、ピラミッド等のモチーフが描かれることがあり、十八世紀の鑑賞者にとっても、エキゾチックな魅力を放っていたことが窺われます。

さて、当館としては四年ぶりに開催するこのエジプト展では、ニューヨークのブルックリン博物館から、選りすぐりの作品約一五〇点をご覧頂きましょう。石碑、宝飾品やパピルス、棺、そして人間や猫のミイラなど、米国内でも指折りと云われるエジプトコレク

ションの精華をお楽しみ下さい。

古代エジプト人の暮らしや信仰、ピラミッドがなぜ、どのように建設されたのか、ミイラはどのように作られたのか……こういった事柄はこれまでの展覧会でも、展示品を通して紹介されてきましたが、それらを実感するにはなかなか至らなかった、というところがあります。この展覧会は小テーマを設けて、それぞれの内容を細かく掘り下げていきながら、お客様に古代エジプトの世界をクエストして頂く、という趣向です。

ファースト・ステージ「古代エジプト人の謎を解け！」では、「書記になれ!」「古代の衣食住」「大いなるナイルの恵み」「出産と子育て」等々のテーマを設けて、疎遠になりがちな古代エジプト人の生活に迫ります。



《ネコの權とミイラ》 前664 ~ 前332年

セカンド・ステージ「ファラオの実像を解明せよ!」では「ピラミッドの時代」「記念建造物と神官」「ファラオの象徴」「一五〇〇柱の神々」等のテーマを通じて、古代エジプトに君臨していた王の実像をご覧下さい。

ファイナル・ステージ「死後の世界の門をたたけ!」では、「来世の入口」「多彩な副葬品」「オシリス信仰」等のテーマに沿って、古代エジプト人の信仰、そこに必須だったミイラについて知って頂きましょう。このステージでは、世界最古の葬送文書と呼ばれる「死者の書」の発音を再現してありますから、会場に流れる古代エジプトの呪文を聴きながら、人間や猫のミイラ、木棺をご鑑賞頂くこととなります。これも会場でご覧頂くピラミッドやその内部の映像は、名古屋大学と



《神官ホル（ホルス）のカルトナージュとミイラ（部分）》 前760 ~ 前558年頃  
いずれもブルックリン博物館蔵 Photo: Brooklyn Museum

ワールドスキヤンプロジェクトの共同調査による、普段は見ることの出来ない貴重なものです。

これらのクエストをガイドしてくれる案内人・本展の監修者、河江肖刺氏（名古屋大学デジタル人文社会科学 研究推進センター教授）は、二〇一六年にはナショナル・ジオグラフィック協会のエマージング・エクスペローラーに選出された、気鋭のエジプト学者。開幕日の四月十九日(土)には、この河江氏の講座の後、閉館後の展覧会を貸し切り状態でご覧頂く、「河江肖刺 プレミアムナイト」を開催。限定一〇〇名様のみお入り頂けるイベントですが、古代エジプト人の暮らしや信仰について、より深く知って頂くことが出来るでしょう。

（上席学芸員 新田建史）

## 新収蔵品の紹介

開館以来、当館では十七世紀以降の東西の風景画、静岡県ゆかりの作品、国内外の現代美術などの収集方針に基づき、コレクションを拡充してまいりました。二〇二四年度は、購入・寄贈により新たに九二件の作品を収蔵することが出来ました。

### 〔日本画〕

江戸時代から現代まで、幅広い時代の作品が新たに収蔵されました。寄贈品は、近代画界の重鎮・松林桂月（一八七六～一九六三）の《松竹梅》、教育者としても現代の芸術界の発展に寄与した平山郁夫（一九三〇～二〇〇九）晩年の作《祇園祭》、そして、榛原郡吉田町の生まれで、多摩美術大学などで教授を務めた八木幾朗（一九五五～）の初期の代表作《グダンスク》と、富士山を主題とする《朝をむかえる富士》、以上四件です。

購入作品は、開館以来収集を続けてきた狩野派の作品で、狩野探幽の息子・狩野探信守政（一六五三～一七一八）筆《雑画貼交屏風》です。いずれも各

画家の作風をよく示す代表作であり、今後展覧会や研究に活用していきます。

（主任学芸員 薄田大輔）

### 〔日本洋画〕

日本洋画では、本県ゆかりの画家石川欽一郎と栗原忠二の作品を各一点ご寄贈賜りました。

駿府移住の旧幕臣の子息として静岡に生まれた石川欽一郎は、英国水彩画を紹介するなど、日本の水彩画の発展に寄与したことも知られています。《ロンドン》は一九二二年のロンドン滞在時の光景を描いたと思われる作品。褐色の紙地を使うことで、雨景に柔らかな暖かみが増えられています。

三島市出身の洋画家栗原忠二は巨匠ターナーに憧れて一九一二年に渡

英し、そこでブラングインに師事しました。栗原は彼らに縁の深いヴェネツィアをしばしば訪れるようになり、その景色を終生描き続けています。茜色に染まる夕暮れのヴェネツィアの港を描いた《ヴェニススの港》には、憧れの世界を追い求める栗原の熱情が映し出されているようです。

（上席学芸員 喜多孝臣）

### 〔西洋画〕

西洋美術の作品としては、素描を一点ご寄贈いただきました。

作者のケル＝グザヴィエ・ルーセルは、一九世紀末のパリで活躍した前衛芸術家グループ、ナビ派の一員として知られる画家です。二〇世紀前半には、理想化された実在の風景のなかに、牧

神やニンフなど神話主題を描いた牧歌的な装飾画の制作に取り組みました。

ルーセルは、一九〇四年と一九〇六年にサン＝トロペを訪れ、新印象主義の画家シニャックと交流し、旅の途中ではセザンヌとの邂逅を得ました。《サン＝トロペの海景》は、そのいずれかの訪問時に、同地で描かれたと推測されます。パステルによる素描を多く残した画家の、ペンとインクによる国内でも貴重な作例です。

（上席学芸員 貴家映子）



狩野探信守政《雑画貼交屏風》（部分）江戸時代（17-18世紀）



栗原忠二《ヴェニススの港》制作年代不明



ケル＝グザヴィエ・ルーセル《サン＝トロペの海景》1903-06年頃



小山田二郎《狂女》1954（昭和29）年



竹崎和征《三島》2010（平成22）年

〔現代美術〕

現代ジャンルでは作品一点を購入し、作品八三件、資料一点をご寄贈いただきました。

購入した小山田二郎《狂女》は、一九五四年の第七回日本アンデパンダン展出品作で、美術評論家の石子順造旧蔵の油彩画です。人物や、背後の構造物には、幾何学形態によるキュビズム風の表現がみられ、色調、光の描出なども相まって幻想的な世界感が表出されています。一九五九年四月に市内で、石子も参加したグループ「白」と、県水彩画連盟が主催した、「小山田二郎個展と講演座談会」が開催されており、パンフレットの文章から、石子が小山田の批判精神を高く評価していたことが分かります。

ここからは寄贈作品のご紹介をいた

します。

長泉町で活躍したヴァンジ彫刻庭園美術館（二〇〇二～二〇二三年）と、分館のIZU PHOTO MUSEUM（二〇〇九～二〇二三年）は、現代美術や写真の分野で企画性の高い展覧会を開催し、二十一世紀初頭の日本のアートシーンに大きな足跡を残しました。二〇二三年に閉館となりましたが、県立美術館では、両館の活動を記憶に残し、所蔵作品を後世に繋いでいくことに意義があると考え、六一点のご寄贈を受けました。川内倫子、長島有里枝、エレナ・トゥタッチコワなどの作家がヴァンジ彫刻庭園美術館での展覧会を機に制作した作品、竹崎和征が長泉に滞在し三島を描いた作品、戸谷成雄、棚田康司らの「彫刻とは何か」という問いに基づく立体作品、静岡ゆかりの持

塚三樹の絵画、当館では初めての収蔵となる映像による作品など、二三名（内九名が女性、一名を除いて新収蔵となる）の作家による作品から成ります。

グループ「幻触」の鈴木慶則による『フェニックス』二号の原画と版画作品、赤瀬川原平による『漫画主義』六号ポスターは、購入作品と同様、石子旧蔵の作品です。《平面にて》、《時空変位》は、「幻触」メンバー飯田昭二が、一九九〇年代はじめに自己表現を放棄する意図で制作した「幻触」以後の作品です。

竹村京の《修復されたC.M.の1916年の睡蓮》は、国立西洋美術館が所蔵するクロード・モネ《睡蓮、柳の反映》の欠損部分を、絹製のオーガンジに絹糸で刺繍することにより想像的に補完した作品です。企画展「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか」（国立西洋美術館、二〇二四）への出品作です。

長船恒利は、写真やパフォーマンス作品、展覧会企画など幅広く活動した作家です。ご寄贈いただいた長船の《在るもの》は、作者の主観によらず、カメラを通して客観的に世界を捉えた代表的写真作品です。

版画家として広く知られた池田満寿

夫は一九八二年に熱海市に住まいを移し、終生この地で暮らしました。彼は芥川賞受賞や陶芸制作など、マルチな才能を発揮した人物でもあります。池田の版画と資料あわせて二二点がコレクションに加わりました。

写真によるイメージを利用した版画作品を発表し、一九七〇年代に版画表現の新たな地平を切り拓いた木村秀樹の版画二点をご寄贈いただきました。

（上席学芸員 川谷承子  
上席学芸員 植松 篤）

ご寄贈くださった方々（五十音順）

- 伊藤 恒道 様
- 長船 知行 様
- 小長井 良浩 様
- 佐藤 陽子 様
- 潮江 宏三 様
- 鈴木 富榮 様
- エレナ・トゥタッチコワ 様
- 橋本 ひろ 様
- 牧寛之 様
- 増田 一郎 様
- 八木 幾朗 様
- ヴァンジ彫刻庭園美術館様
- 株式会社美術著作権センター様

記して謝意を表します。

新収蔵品展

二〇二五年四月九日（水）～六月十五日（日）  
※現代美術の作品は一部のみ展示となります。

# 『古きフランスのピトレスクで ロマンティックな旅：オーヴェルニュ編』 における火山地形の描写について

上席学芸員 貴家映子

当館がウジェーヌ・イザベイによる挿絵十七葉を所蔵する『古きフランスのピトレスクでロマンティックな旅：オーヴェルニュ編』の舞台は、近代地質学の発展において重要な役割を果たした土地として知られる。一七五一年にジャン＝エティエンヌ・ゲタールが同地方での火山活動の痕跡を発見して以来、同じフランス人のデマレ、ドイツ人のプッフ、イギリス人のスコープやライエルといった著名な地質学者が同地方の調査に基づく自説を発表した<sup>1</sup>。本稿では、そうした地質学にまつわる知識や歴史にも目配せしながら、「オーヴェルニュ編」の成立背景や、イザベイによる挿絵の特徴を考察してみたい。

まず、第一巻の冒頭に掲載された口絵に着目しよう(図1)。建築のファサードを模した構成のうち、中央部分の風景画について、著者は次のように説明する。

「建造物のようなこの前書きは、ピュイ・ド・ドームとヴレーの地を豊かなものとする中世の様々なモニュメントの細部や断片によって構成されている。中央に描かれるのは、オーヴェルニュ地方を覆い尽くす数々の火山が噴火する様子であり、その地下からの炎の爆発に包まれた自然がもたらす恐るべき光景である。ピュイ・ド・ドーム、サンシーの頂、カンタル、グラヴレル、ヴォルヴィック、モン・オドゥ、シャンテュルグといった山々が溶岩を吐き出し、煙と灰による黒雲が空を暗くする。これら火山の炎が、その山々を源とする川の一筋の水面に照り輝く。この構図においては、キリスト教のシンボルが帝政ローマ末期の遺物の上に配される、両者の同時的な存立が

許されており、福音書の教えの恩恵がオーヴェルニュ地方に初めてもたらされた時代を表現している<sup>2</sup>」

これら歴史的遺物の傍らで、噴火の熱を物ともしない一人の男が瞑想する光景は、当時の読者の多くが共有していたであろう崇高への感受性を大いに満足させるものであったにちがいない。しかし、同地方の火山のうち、最も若いとされるシエヌ・デ・ピュイの山脈ですら、その活動期間は、約九万五千年前から約七千年前とされ、中世よりはるか以前の出来事である<sup>4</sup>。初期中世の遺物と火山の噴火のスペクタクルが同一画面に描かれるのは明らかに時代錯誤であるが、オーヴェルニュ地方の多様な自然風景や歴史的遺産のピクチャレスクな美を象徴的に示すための、想像力豊かなカプリッチョと言えよう。

火山地形への着目は、純粹に美学的な関心以外の要因も指摘できる。十九世紀最初の四半世紀、フランスでは実証的な地質学が発展し、「オーヴェルニュ編」が刊行された一八二九―一八三三年は、この学問が世に認められていった時期と重なる。同国の地質学協会が設立されたのは、刊行が開始された翌年の一八三〇年であり、一八三二年には、国王ルイ・フィリップの命によりその公益性が認められた。一八三三年には、国立自然史博物館の一部門として鉱物学・地質学ギャラリーの建設が始まっており、フランスで初めて、博物館という用途で新たに建造された建築物となった<sup>6</sup>。ゴシック建築の宝庫としてのノルマンディー、



図1 ジュスタン・テロール、ジャン＝バティスト＝ジョセフ・ジョランド、テオフィール・フラゴナールの合作による『オーヴェルニュ編』第1巻の口絵  
Source gallica.bnf.fr / BnF

著者の一人ノディエの故郷フランシュ・コンテにつづいての、オーヴェルニュという地方の選択と、火山地形への注目の背景には、こうした科学的関心の高まりも挙げられよう。

口絵で象徴的に示された同地方の特色は、イザベイの挿絵にどのような影響を与えているのだろうか。火山地形を描いた『エダ湖』に着目してみよう。この湖は、現在では、溶岩流が形成した天然のダム湖であることが明らかとなっている。しかし、文中で火山地形としての成り立ちが簡潔ながらも言及されているシャンボン湖やバヴァン湖とは異なり、エダ湖にまつわる叙述の多くが、帝政ローマ末期の文学者シドニウス・アポリナリス(四三〇―四八九)との関連性に割かれている。

六ページに渡って引用されるその書簡には、自らの別荘アウイタクムの豪華な建築や設備、そしてそれを取り巻く環境が事細かに記されている。著者は、その地形や名前との類似、近隣に残る当時の遺構などから、エダ湖をアウイタクムの所在地と推定する。

注目したいのは、湖畔の自然描写である。そこでは、涼しい木陰をつくる菩提樹の大木や、水面を緑色に染める草地、小舟の下

でたわむ低木、揺れる花綱や柳に、睡蓮などが次々と登場する。当時もよく知られていた小プリニウスの書簡の影響や、純粹に修辭的な虚飾を差し引いても、アウイタクム、すなわちエダ湖の周辺が、緑豊かで瑞々しい土地であるという印象は強く残る。

一方、イザベイの挿絵(図2)を見てみると、遠景の山々は、ごつごつとした輪郭線で描かれ、中腹は、堆積する地層あるいは等高線を思わせるような水平方向の線描に覆われており、そこに木陰をもたらずような緑は描かれていない。中景の集落には葉の繁った木々が姿を見せているが、前景左側の樹木にはほとんど葉が残っていない。幹や枝が太い線描で黒々と描かれたその姿は、ただ冬枯れているというだけでなく、「焼け落ちた世界の死骸」「陰鬱な草木がこちらこちらで溶岩を覆う」といった本編序文の言葉を思い起こさせるメランコリックさを帯びている。



図2 ウジェーヌ・イザベイ《エダ湖》1830年 当館蔵  
〔「オーヴェルニュ編」第1巻 第114葉〕



図3 ジャン＝エティエンヌ・ドゥレクリュース《「オーヴェルニュの旅」より「バヴァン湖の内部」》1821-55年 ロジェ・キリオ美術館(クレルモン＝フェラン)  
Étienne-Jean Delecluze, Voyage en Auvergne [album de 72 dessins réalisés entre 1821 et 1855], Ville de Clermont-Ferrand, musée d'art Roger-Quilliot, inv. 2010.9.1.



図4 アドリアン・ドーザ《バヴァン湖》1830年頃  
〔「オーヴェルニュ編」第1巻 第113葉〕  
Source gallica.bnf.fr / BnF

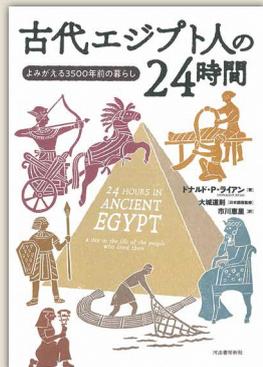
- 1 諏訪兼位「岩石はどうしてできたか」岩波科学ライブラリー200、岩波書店、二〇一八年、九、二十頁。言及した地質学者の原語表記と生没年はそれぞれ以下の通り。
- 2 Jean-François Guérard(一七二五―一七八六)、Nicolas Desmarest(一七二五―一八一五)、Charles Leopold von Buch(一七七四―一八五三)、George Julius Poulett Strope(一七九七―一八七六) Charles Lyell(一七九七―一八七五)。
- 3 イザベイと「オーヴェルニュ編」については以下の拙稿も参照。貴家映子「古きフランスのビートルスクでロマンティックな旅：オーヴェルニュ編」におけるウジェーヌ・イザベイの挿絵の成立背景について「アマリス」一四八号、二〇一三年、六一―七頁。
- 4 Charles Nodder, Justin Taylor, Alphonse de Caillaux, "Explication de frottepiecec," Voyages pittoresques et romantiques dans l'ancienne France, Vol.I, Auvergne, Gide et Fils, Paris, 1829, pp. 56-57. この風景を枠取るように壁画や彫像を模して表されているのは、同地方を代表する聖人や偉人たちである。以下、同地方編についてはVPAと省略して示す。
- 5 La stieweb d'un centre de culture scientifique, Vulcania (https://www.vulcania.com/science/auvergne/volcans-dauvergne/la-chaine-des-puy/二〇一五年二月十五日最終閲覧) 著者が具体的に列挙した山々が、数百万年前から数万年前という長期的なスパンで断続的に活動を繰り返した上でも、現在では明らかにみごとく。
- 6 La stieweb de la La Société Géologique de France (https://www.geo.soc.fr/propos-hml/historique/les-origines-de-la-sgf.html/二〇一五年二月十五日最終閲覧) "Les trésors oubliés de la galerie de minéralogie-géologie," *Le Monde*, 06 décembre 2000.
- 7 VPA, vol.1, p.118 et p.128.
- 8 VPA, vol.1, pp.119-124. ニウスの当該書簡のこの下は以下が詳しく。J. Visser, "Sidonius Apollinaris, Ep. II.2: The Man and His Villa," *Journal for Late Antique Religion and Culture*, vol. 8, 2014, pp.26-45.
- 9 VPA, vol.1, p.2.

た同地方の姿に寄り添って描かれていると言えそう。但し、同地方を描いた別の画家、例えば、ドゥレクリュースのデッサン(図3)と比較すると、イザベイの描写には地質学的な正確さが担保されているように見え、その関心は、あくまで美学的なものに留まっているように思われる。同じく火山地形であるバヴァン湖(図4)やシャンボン湖の挿絵では、その雄大さが容易に崇高美に通じる一方、イザベイの挿絵ほどのメランコリックさは感じられない。

イザベイの挿絵にこうして看取される本文の記述との相違や、他の画家とは異なる自然描写は、この壮大な刊行物全体をどのように逆照射し、その特徴を示してくれるだろうか。今後も稿をあらためて考察を深めていきたい。

## 本の窓

ドナルド・P・ライアン 著  
大城道則 日本語版監修  
市川恵里 訳  
「古代エジプト人の24時間  
よみがえる3500年前の暮らし」  
河出書房新社 二〇二〇年



人がいる限り、必ずそこには生活があります。ちよつと想像がつきにくい古代エジプトでも、やはり色んな人が種々の暮らしを営み、泣いたり笑ったりして過ごしていました。この本は産婆や王、兵士、農夫、踊り子、果ては墓泥棒にいたるまで、様々な職業を取り上げ、基本的にフィクションの形で紹介してくれれます。古代のエジプトというと、神秘のヴェールに包まれた謎の文明などと思ってしまうのですが、一読して頂ければ、彼らもまた我々と変わらない、楽しみも悩みも持つ人々だったのだと気づかされます。あと三千年くらい経って、誰かがこういう本を書く時、我々はどうな風に紹介されるんでしょうねえ？お勧めします。

(上席学芸員 新田建史)

## 昨年度を振り返って

学芸課主任 山本勇実

皆様はじめまして。昨年度から静岡県立美術館の教育普及を担当しております山本と申します。早いもので私がこちらの美術館に着任してから一年が経ちました。これまでずっと中学校で美術教員をしてきたため、着任当初は慣れない環境に戸惑うこともありましたが、職員の皆様の支えもあり、少しですが心に余裕が生まれてきたと感じております。

さて、所感にはなりませんが、一年間教育普及に携わってきた中で、個人的に感じたことについてお話させていただきます。かと思えます。まず、この静岡県立美術館は他の美術館と比較しても教育普及という分野においてかなり力を入れている美術館であると感じております。一トシ近く用意された粘土を使う「ねんど開放日」、たくさんの絵の具を使って自由に描く「えのぐ開放日」、展覧会と関連させたワークショップ



ねんど開放日に実技室スタッフが制作した象

「実技講座」「わくわくアトリエ」など、来館者に楽しんでもらうための多くのプログラムが用意されています。また、一般の来館者だけでなく、学校を対象にした「美術館教室」も存在し、幅広い層に向け教育活動を実践してきた歴史があります。

学校教育の図工・美術の目標の中に「美術を愛好する心情を育てる」というものがあります。当館の教育普及事業はまさにこの「美術を愛好する心情」を育むことに大きく貢献してきたのではないのでしょうか。

芸術という分野は、日本において「敷居が高いもの」「創作が得意な一部の人だけが楽しめるもの」という認識がぬぐい切れず、個人に感じているのですが、そういった認識を変えていくためにも、このような普及事業に美術館が力を入れ、実践していくことには大きな意味があると思っております。

私は今年二年目になりますが、昨今の物価高騰に伴う予算削減の影響が教育普及事業にも影響しており、活動にもいろいろな制限がかかってきているように感じています。この時勢の中で、私たち実技室スタッフにできることを模索し、より教育普及を進めていくための挑戦の一年になるよう努めていく所存です。皆様今後ともどうぞよろしく申し上げます。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館) 年末年始  
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
企画総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館  
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

「次世代へつなぐ！静岡県立美術館  
アートとみどりの散歩道 再生プロジェクト」  
修復作業経過報告

ご寄附を活用した作品の修復作業と植栽の整備が始まりました。昨年12月に、専門の修復業者によるトニー・スミス《アマリリス》の修復作業が行われ、作品本来のシャープな黒が見事によみがえりました。今年2月上旬には、清水九兵衛《地簀》と大西清澄《瀟の塔》周辺の植栽が撤去されました。茂った植栽が、長らく作品の足元を覆っていましたが、これにより鑑賞環境が大幅に改善しました。作業の経過を追った動画をYouTubeに公開していますので、ぜひご覧ください。本原稿執筆中の2月中旬からは、清水九兵衛《地簀》の修復と、ベンチや芝生の整備が順次行われ、3月末に完了する予定です。次号、『アマリリス』158号(令和7年7月発行)では、本プロジェクトの最終的な成果をご報告いたします。

あらためまして、ご支援、ご協力いただきました皆様に、館員一同、心より御礼申し上げます。



こちらのQRコードよりYouTube動画をご覧いただけます。

## 収蔵品展

## 新収蔵品展

4月9日(水)～6月15日(日)

本館竣工40周年記念 たてもの探訪  
7月1日(火)～8月17日(日)

## 絵から読む物語

8月19日(火)～9月28日(日)

2000年代の絵画～静岡ゆかりの作家による  
2026年1月20日(火)～4月19日(日)